

# 山口西田讀書会プロトコル

Dec. 7. 2019 奈原伸雄 記

## I 講読内容の整理：西田幾多郎『働くものから見るものへ』(内部知覚 五117頁(9行)~120頁(6行)) 11/16

「無と考へられるものが積極的内容を有して判断の主語となる時\*」……、何事かが生起して自ずから展開するようなこの一節は、いつの頃か物心が付いて、生まれたときには無かったはずの「意識」が立ち上がって働き始める事態を連想させる。これを契機に事実上おのれの「存在」が誕生し、存在は言葉とともにあって、いずれ「種々なる構成的範疇の成立\*」を見る。

「構成的範疇」は、①「ある」、②「有つ」、③「働く」、④「知る」の4つに分類される。これは、意識が自らの「論理」の力を使って「認識」と「行為」を構成するとともに、最終的には「存在」をも保証すると読める。なお「論理の力」とは、もともと「無」であった「意識」が、否定も肯定も含め自己を限定する能力であり、「無を無化」して「有」に転ずるとともに、積極的な意味を帯びて「有の有」となり、範疇を行使する創造的な主体になると解される。

各々の「範疇」の説明と思しき箇所を抽出してみると、①「ある」は「すべての述語的なものを個性化する最後の種差其物が一般者の中にある\*」「質料の中に必然的に形相を含んだもの\*」であり、②「有つ」は「最後の種差が一般的なるものを含む\*」「質料の中に形相を含んで尚余りある時\*」に成立する「思慮の範疇\*」である。また、③「働く」は、「質料と形相と之を結合するもの\*」の異質の三者が一体となり、かつ「基體なき作用に至って\*」成り立つ「作用としての本體\*」である。(④は次回以降の講読対象)

これまでの講読範囲から、判断の純粹形式であった「範疇」が機能を強化し、「精神的なもの」と実在的なものを同時に含む動的構造、思想そのもの<sup>1)</sup>にまで迫ろうとしていることは理解できる。特に、③「働くもの」は「特殊かつ一般にして全体\*」を仕切る立場を確保し、判断の「司令塔」の役割を担っていると目される。「基體なき作用」にして「作用としての本體」とは、専ら「機能」に着目した純粹な課題解決能力そのものであろうか。しかし、それにしても、日本語にしばしば主語が省略されるように、「誰が」最終の責任を取る「構成主体」であるのか未だ見えない。第4の範疇である「知る」の解明が待たれる。

## II 哲学的問い：「悪は存在するか」(再提示)

悪は存在する。なぜなら、物心両面において「悪」の存在感は圧倒的であり、物証も人証もあり過ぎるほどあるから。この日常感覚は、「悪=非存在<sup>1)</sup>」という決め付けを攪乱して事の本質に迫る。西田は「直観的世界の底には悪魔が潜んでいる<sup>2)</sup>」、それは「苦悩の世界である<sup>2)</sup>」と述べた。因みに、直観は「現象の世界をとおして、その奥にある根本的実在を直覚<sup>3)</sup>」し、「我々の行為を惹起するもの、我々の魂の底までも唆すもの<sup>2)</sup>」とさえ言う。

『善の研究』の表層のイメージとは裏腹に、「西田は形相を実在と考えるギリシア思想に対して、反対に質料を実在と考えた<sup>3)</sup>」。「質料」の母体は「混沌<sup>1)</sup>」であり「悪の起源<sup>1)</sup>」ともされるが、「西田の質料」は加えて内に「形相を含んで尚余りある」「それ自身が一つの体系\*」を持つ実在である。「根本的潜在\*」としていずれ「超越的对象と意識の必然的統一\*」との合一を果たす、分裂もするが統一もする、いわば破壊的創造力そのものといえる。

従って、「悪の起源は形相の完全な実現を許さない質料の粗悪さに求められた<sup>1)</sup>」という見解は通用しない。西田にとっては、「無」が自己限定して「有」に転ずるように、「悪」は自己限定して「善」になる。その生成のプロセスが発散するあらゆる汚名を一身に引き受け、自責と悔恨と社会的制裁と幾多の試練を乗り越えて、自力で更生し昇華を目指す。

冒頭の「構成的範疇」の成立は、自らの「混沌」を「秩序」づける「悪」の自己限定の成果であった。この成果を引き継ぎ最後にゴールを決めるのが「善」である。例え「内面的動機が私利私欲<sup>4)</sup>」であっても、「この偽我を殺し尽して一たびこの世の慾より死して後蘇る<sup>4)</sup>」。この「花形」は受け取る花が多過ぎて外在的に超越し、かつ哲学の「表紙」を飾ることになる。

【引用：詳細別紙参照】\* 西田幾多郎『働くものから見るものへ』(内部知覚) 1) 『岩波哲学思想事典』 2) 『西田幾多郎全集』(新版第八巻 哲学論文集第三) 3) 小坂国継『西田哲学の基層』 4) 西田幾多郎『善の研究』

## 【別紙】山口西田讀書会プロトコル(Dec.7.2019)：補注

### 《引用》

#### \* 西田幾多郎『働くものから見るものへ』内部知覚（配布テキスト）

「無と考へられるものが積極的内容を有して判断の主語となる時」117頁10行

「種々なる構成的範疇の成立」117頁10～11行

「すべての述語的なるものを個性化する最後の種差其物が一般者の中にある」119頁1～2行

「質料の中に必然的に形相を含んだもの」118頁5～6行

「最後の種差が一般的なるものを含む」119頁2～3行

「質料の中に形相を含んで尚余りある時」「思慮の範疇」118頁6～7行

「質料と形相と之を結合するもの」120頁2行

「基體なき作用に至って」120頁4行 「作用としての本體」120頁3行

「特殊かつ一般にして全体」115頁3～4行を簡略化

「それ自身が一つの体系」※『西田幾多郎全集』新版第三卷(2003.11.26岩波書店)335頁3～4行

「根本的潜在」同上339頁3～4行 「超越的対象と意識の必然的統一」同上339頁5～6行

#### 1) 『岩波哲学思想事典』(2010.3.5岩波書店)

「精神的なものとするものを実在的なものを同時に含む動的構造、思想そのもの」249頁[カテゴリー]

「悪＝非存在」11頁[悪] 「混沌」219頁[カオス]、559頁[混沌]

「悪の起源は形相の完全な実現を許さない質料の粗悪さに求められた」950頁[善949～952頁]

#### 2) 『西田幾多郎全集』新版第八卷 哲学論文集第三「絶対矛盾的自己同一」(2003.9.26岩波書店)

「直観の世界の底には悪魔が潜んでいる」409頁1行 「苦悩の世界である」409頁4行

「我々の行為を惹起するもの、我々の魂の底までも唆すもの」409頁7行

#### 3) 小坂国継『西田哲学の基層』(2011.11.16岩波書店)

「西田は形相を実在と考えるギリシア思想に対して、反対に質料を実在と考えた」まえがきvi頁1～2行  
直観は「現象の世界をとおして、その奥にある根本的実在を直覚」19頁5～6行

### 《語義整理(私見)》

◆「無」：「西田の無」に関しては、「絶対に無なるものが自己を否定することによって一切の有を生ずる」、「それ自身はいかなる形ももたないがゆえに、いかなる形をも生み出し得る」という解説①がある。遡れば、宗教神話の始まりは「無からの創造」であった。また、実存主義では、悲哀や失意など深い喪失感を契機に、「存在が欠落している無の場所こそ、存在の真理の現成すべき場所」となり、単に「<有>に対する<無>」であったものが、「<存在>充溢としての無」へ高まると説かれもする②。しかし、どの説を採っても「白を黒」と言われたような不全感是否めない。これが「無」の深意であり威力であろうか。従って、ここは取り敢えず経験的な「思い当たる節」に探りを入れ、誰もが発達段階において経験するであろう、意識が「無い」状態から「有る」状態への劇的な変化を連想しておく。

【引用】①小坂国継『西田哲学の基層』まえがきvi頁5～6行 ②『岩波哲学思想事典』1559～1560頁[無]抜書

◆「意識」：③意識を④意識するところの⑤意識の総体。例えば、③対象としての意識を、④認識しかつその認識作用を反省して、⑤なお余りあるところの思惟の元締め。即ち、科学的対象、哲学的機能及び超越的主観。講読部分では、「範疇」、「範疇構成力」及びその「作用の本體」が該当すると思われる。

◆「構成」：物事を「結合し、統一すること」から、「意味形成」、さらには「主観が客観を産出すること」や「創造」まで幅広い意味⑥を含む。西田が提起する「無」は、無限の創造的作用の主体となって、対象の意味を「形成」するのみならず、対象を主体的に「創造」する最も積極的な機能をも持つと解される。

【引用】⑥『岩波哲学思想事典』491～492頁[構成]抜書

◆「悪」：「西田の無」には有無相対の「基盤となる絶対的な無」⑦という意味合いがある。この論理に倣うなら、善悪相対の基盤は絶対の「悪」でなければならない。同様に、有無相対の止揚が絶対の「有」であるなら、善悪相対の止揚は絶対の「善」となる。西田における「無の自己展開」の内実は「悪の自己展開」であり、このあたかも「悪人正機」⑧のプロセスにおいて、「悪」は自己否定と自己実現を経て「善」になると解する余地はないか。 【引用】⑦『デジタル大辞泉』[無]抜書 ⑧『岩波哲学思想事典』13頁[悪人正機]